

テンパス

TEMPUS

2008年(平成20年) **32**号



も く じ

貝塚市内建造物調査の成果—近代建築の調査から—

特別展2「貝塚市内の近代建築」のお知らせ

市内の古文書調査から

「幹工務店所蔵建築関係資料」

古文書をひも解く

「幕末の助郷制度について

—京街道の宿場町と泉州の村々—

平成19年度の埋蔵文化財調査

願泉寺本堂墓股の「二十四孝」彫刻

貝塚御坊願泉寺 平成大修復 定期見学会のお知らせ

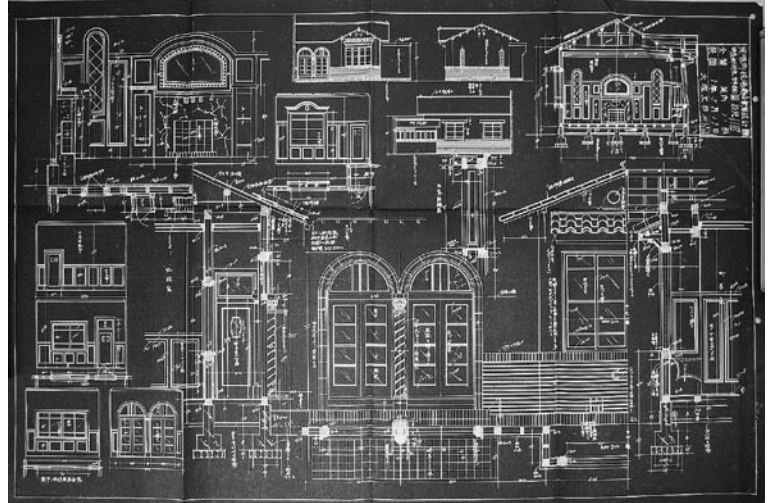


貝塚市内建造物調査の成果—近代建築の調査から—

貝塚市では、市内に存在する江戸時代から昭和初期にかけての歴史的建造物について適切な保存と活用を行うことを目的とし、平成19年度より貝塚市内建造物調査委員会を設置して3年間の予定で調査を実施しています。今年度は主に近代建築の調査を行っており、調査委員の大阪人間科学大学の植松清志教授とともに聞き取りや測量調査、記録写真撮影等を行っています。

また、建造物調査に伴い、建築関係資料として貝塚市の公文書や市内に残された古文書調査もあわせて実施しています。(古文書調査成果については4頁「市内の古文書調査から」を参照してください)

近代には政府の積極的な近代化政策に伴い、役所、学校、駅などの公共施設や工場などにおいて、これまでの伝統的な日本建築ではなく、洋風の技術を取り入れた建物が建築されるようになります。特に明治から大正初期には古くから盛んであった綿紡績、織物業の工場が市内に多数建てられました。これらの工場のうち大規模工場は煉



旧貝塚町役場設計図



寺田紡績株式会社工場

瓦造(れんがづくり)の建物が多く見られます。煉瓦はこれも明治時代に操業を開始した大阪窯業株式会社貝塚工場から運び込まれていました。現在市内に残っている煉瓦造の建物は寺田紡績株式会社(貝塚市津田所在)の工場とコストモール二色の浜に残存する建物です。そのほかの多くの工場は鋸屋根(のこぎりやね)といって屋根の形状が鋸の刃のようになった木造建築でした。こうした鋸屋根の工場は今も市内の数ヶ所で目にすることができます。

一方、住宅建築については、ほとんどが伝統的な日本建築で建てられていますが、下見板(したみいた)貼りといって外壁に横板を貼り付けたものや一部にステンドグラスや洋風の意匠を取り入れた建築が見られるようになります。

このような建築には地元の大工が深く関わっていたことが調査からわかります。市内の各地域には江戸時代から続く大工職人が多くいましたが、このような大工職人は近代建築についての雛形(ひながた)や他地域にある近代建築を見に行くなどして独自に技術を学んでいたようです。



今も残る鋸屋根の工場
(株式会社テザック三ツ松作業所)



ユニチカ株式会社貝塚工場社宅

市内にはまだまだ多くの近代建築が残されているほか、江戸時代からの民家や町家も多く残されています。これらの歴史的建造物は市内の村落形態や近代化の過程などの歴史を考えるうえで重要なものであり、開発等によって一度失われてしまうと復元が難しいため、早急な記録化と保護措置が必要になってきます。今後もこのような歴史的建造物についての調査を進め、調査成果について、テンプスや展示などで紹介していきます。

貝塚市郷土資料展示室

特別展2「貝塚市内の近代建築」のお知らせ

貝塚市では、平成19年度から3年間の予定で貝塚市内の建造物調査を実施しています。市内には、工場や住宅などの近代建築のほか工場誘致や公共施設建築などの市域の近代化を物語る資料が多く存在しています。本展ではこれらの建造物関係の調査成果を展示することにより、貝塚市の近代化の過程について紹介します。

会 期：平成20年2月2日(土)～3月23日(日)

場 所：貝塚市郷土資料展示室（貝塚市民図書館2階）

観 覧：無 料

休室日：毎火曜日、2月11日（月・祝）、2月21日(木)～3月4日(火)（図書館整理休館日）
3月20日（木・祝）

◆◆◆関連事業のお知らせ◆◆◆

□第81回かいづか歴史文化セミナー

大工道具講座「昔の大工道具にふれてみよう」

昔の大工道具の実演を見学したり、実際に道具を使って工作をしたりします。

日 時：平成20年3月8日(土) 午後2時～

場 所：貝塚市民図書館2階視聴覚室

講 師：西出龍生氏（幹工務店）

定 員：小・中学生30名（小学生は保護者同伴で）※応募者多数の場合は抽選となります。

申 込：(072) 433-7126（社会教育課文化財係）

□第82回かいづか歴史文化セミナー

記念講演会「貝塚市近代建造物調査の成果について」

平成19年度におこなった貝塚市内の建造物調査についてお話いただきます。

日 時：平成20年3月16日(日) 午後2時～

場 所：貝塚市民図書館2階視聴覚室

講 師：植松清志氏（大阪人間科学大学教授）

※記念講演会については事前申込の必要はありません。

市内の古文書調査から

◆幹工務店所蔵建築関係資料

平成19年9月から11月にかけて、貝塚市堤に所在する幹工務店に保管されてきた、建築関係資料を調査しました。

幹工務店は、西出利一郎氏（1909-1986）が戦後に興（おこ）した会社で、2代目龍生（たつお）氏、3代目幹生（みきお）氏が跡を継いでいます。調査により確認した資料のうち、書物で最も古いものは元禄13

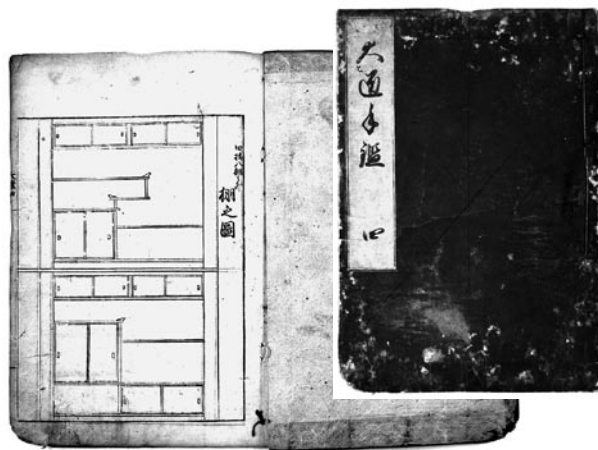
（1700）年に江戸で刷られた『新編拾遺大工規矩尺集（しんぺんしゅういだいぐきくしゃくしゅう）』（全3巻）です。この本は、建築物の構成や構造部分の意匠を立体幾何学的に求め、実体の上に割り付け作図する方法（＝規矩術）が述べられているもので、大工の持つ技術を全国的に広めようとする意図で刊行されたものです。また、これ以外にも、宝暦14（1764）年に江戸で再版された、家の造作

である床の間の棚の種類を紹介した『大匠手鑑（おおたくみてかがみ）』（四巻のみ）や、天保15（1844）年大坂で刷られた、様々なものの形を計測するための計算法が記された『算法稽古宝（さんぼうけいこだから）』や、明治43（1910）年刊で、西洋建築の様式を取り入れ、図示などが事細かく見られる『新撰大匠雛形大全（しんせんおおたくみひながたたいぜん）』（全6巻）を確認しています。

また、初代利一郎氏の大工としての活動の一端が垣間見れる資料として、「近義南太子講名簿」がのこされています。この名簿によると、近義南太子講は昭和3（1928）年6月に結成されたらしく、南近義村（現在の沢・浦田・窪田・堤・王子・地蔵堂・橋本にあたる）に所在する建築業者当初5名が加入し、会員相互の親睦と連絡を目的としたもので、大工の祖として聖徳太子を奉賛していることから「太子講」と名付けられています。大正12（1923）年、山直（やまだい）下村（現在の岸和田市岡山町）の大工宇野才造氏に弟子入りした利一郎氏は、昭和5（1930）年6月に独立し、近義南太子講に加わっています。また、同時期の「請負帳」や「工数帳」からは当時の仕事の内容や、その仕事にたずさわった期間などが明らかになっており、それぞれ大工の仕事を解き明かす上で貴重な資料と言えます。



『新編拾遺大工規矩尺集』（元禄13年刊）



「大匠手鑑」（宝暦14年再版）

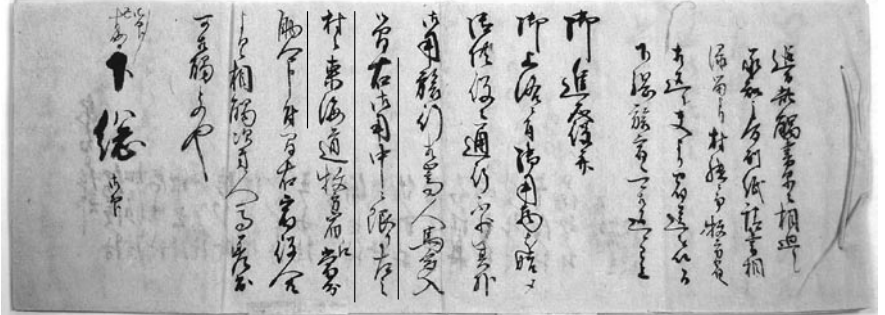


「近義南太子講名簿」（昭和初期）

古文書をひも解く

◆幕末の助郷制度について—京街道の宿場町と泉州の村々—

江戸時代のはじめ、五街道（東海道・中山道・奥州街道・甲州街道・日光街道）を中心に全国の諸街道が整備されていきました。そうした街道には人馬が行き来し、宿場町（人馬の継ぎ立てや宿泊を主なりわいとする交通の要衝にある集落）も発展していきました。一般に「東海道五十三次」と呼ばれるのは、江戸日本橋から京都三条大橋までの間に53の宿場町があったからです。



道中奉行小栗下総守政寧が出した触書の写し
「右御用中二限り左之村々東海道枚方宿へ当分助郷申付」とあります

貝塚市畠中の要家文書には、そうした宿場町の維持管理に関わる史料がのこされています。慶応元（1865）年10月晦日、幕府道中奉行（勘定奉行が兼務）小栗下総守政寧（おぐりしもふさのかみまさやす）から触れが出されました。その内容は、京街道（江戸時代後期には京都—大坂間も「東海道」の一部と位置づけられていました）の宿場町であった枚方宿（ひらかたしゅく）の宿場維持に掛かる費用の一部を、泉州岸和田藩領18か村（現在の貝塚市南西部〈近木庄地域〉と泉佐野市域にあたる）の村々に負担してもらおうというものでした。宿場町の近隣の村々が宿場町の費用を助け合うこの制度を、「助郷」制度と言いました。ただし、枚方と現在の貝塚市・泉佐野市にある村々との距離は約50kmもあり、決して近隣とは言えるものではありませんが、慶応元年は「御進発」（長州藩を幕府連合軍が攻撃した第二次長州征討〈幕長戦争〉のこと）と「御上洛」（14代将軍家茂への代替わりのため天皇に拝謁すること）という緊急事態のため、臨時に負担を求めることになったのです。求められたのは人足60人・馬70匹を差し出すよう、道中奉行から命じられました。

この時同じく京街道の宿場町であった守口宿もまた泉州岸和田藩領45か村（現在の岸和田市域と貝塚市北東部から南部〈麻生郷・木島谷地域にあたる〉）を助郷としています。

二つの助郷を引き受けることになったものの、岸和田藩領には岸和田と信達（しんだち）の二つの宿場町がありました。紀州藩14代藩主徳川茂承（とくがわもちつぐ）が「御進発」の先鋒総督となり、紀州街道も進軍路となったため、京街道と紀州街道の二重の負担が村々にとって厳しいものとなりました。その負担に耐えかねた岸和田藩領の村々は、幕府道中奉行に軽減を求め、守口宿に対しては慶応2年1月「七歩御免除」（負担の7割を免除）が認められ、枚方宿に対しても翌月には「七歩御免除」が認められました。さらに守口宿への助郷は同年10月に全てを免除されるに至りましたが、枚方宿への助郷は慶応3年6月になってもなお、残る「三步」（負担の3割）の助郷免除を求めていることから引き続きのこされていたものと考えられます。



「守口助郷一条二付諸入用之扣」
守口宿への助郷の出費をこと細かく記している計算書

助郷制度はこの後、明治5（1872）年、郵便制度の普及とあいまって宿駅制度とともに廃止に至りました。

平成19年度の埋蔵文化財調査

平成19年度の発掘調査は12月末日現在、遺跡内の確認調査を37地点、遺跡範囲外の試掘調査を12地点行いました。

弥生時代から古墳時代では、遺物包含層（土器などを含む地層）を加治・神前・畠中遺跡の3カ所の調査地において確認しました。

中世では、明楽寺跡、新井ノ池遺跡で遺物包含層を確認し、加治・神前・畠中遺跡、海塚遺跡、小瀬大道端遺跡、王子西遺跡、脇浜遺跡においては、鋤溝を検出しており、中世の農地跡を確認しました。

近世では、貝塚寺内町遺跡においては、整地層および溝を確認しました。

遺跡範囲外では、中世の遺物包含層及び鋤溝を発見し、新たに遺跡包蔵地として橋本原宮遺跡を登録しました。

以下、今年度実施した発掘調査について、主な調査成果を紹介します。

●加治・神前・畠中遺跡（加神・畠中所在）

弥生時代～古墳時代

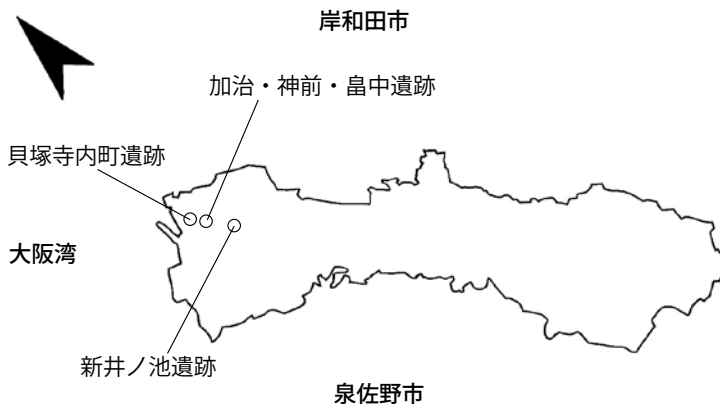
本遺跡の3カ所の調査地において弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層を確認し、弥生土器や土師器が出土しました。加治・神前・畠中遺跡では、過去の調査事例で市役所周辺や貝塚中央線の建設に伴う調査において弥生時代から古墳時代にかけての集落を確認しています。今回の調査では、建物や溝などの遺構（生活痕跡）は発見できませんでしたが、各調査地は弥生時代から古墳時代にかけての集落域および活動域に含まれるものと推測され、今後、周辺から新たな竪穴住居等の集落跡が発見される可能性があります。

中世

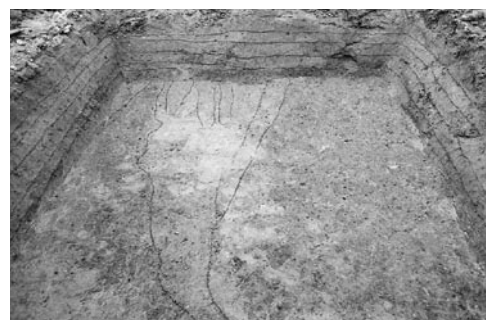
調査地1では、個人住宅に伴う調査において、北西－南東方向の遺構の一部を確認しました。遺構の規模は幅1.5m以上、深さ約1mを測り、埋土は2層に大別できました。滞水状態となった遺構には、水分を多く含む粘土が堆積（下層）し、多数の瓦や20cm大の石が廃棄されていました。湿地状態となった遺構は人為的に埋め戻され（上層）、その後、農地として利用されたものと推測されます。

この遺構の性格は明確にはわかりませんが、条里制に伴う坪境溝や水路と考えられるほか、遺構の規模が大きいことから室町時代末期に築かれた畠中城に伴う濠であった可能性もあります。

また、調査地を含む周辺には「トウゲンジ上」、「トン行寺」などの小字名が残っていることや多数の瓦が出土していることから、寺院に関連する施設である可能性もあります。



貝塚市遺跡位置略図



加治・神前・畠中遺跡（調査地1）



調査地1 溝（遺構）断面

調査地2では、建物の建設工事に伴う調査において、耕作に伴う鋤溝を東西方向7条、南北方向4条を確認しました。これらの鋤溝の上層に堆積している層からは土師器、瓦器などの中世の土器が出土しています。確認した鋤溝は、土地を耕した痕跡であることから、中世には本調査地やその周辺は農地として利用されていたことがわかります。

●新井ノ池遺跡（新井所在）

個人住宅の建設に伴う調査で自然流路の一部を確認しました。検出した流路の幅は1.5m以上、深さは0.25mです。流路は地形などを考慮すると北東方向に流れていたものと推測されます。流路堆積層より土師器、瓦器が出土しており、流路は中世段階に埋没したものと考えられます。この流路の堆積層にはヨシと思われる植物の茎が認められたため、流路は沼地のような状態となり、ヨシなどの植物が生い茂っていたものと推測されます。

この周辺の過去の調査事例では、弥生時代の土器などが出土した自然流路を確認していることから、本遺跡においては、埋没河川が存在し、流路の方向が変化したり、洪水など土地が不安定であったため、農耕技術が発達した中世に本格的な開発が行われるようになったと考えられます。

●貝塚寺内町遺跡（北町所在）

個人住宅の建設に伴う調査では、2条の平行する溝を確認しました。これらの2条の溝については、溝より瓦片が出土したほか、溝の上層から出土した遺物の時期を考慮すると近世後半頃に設けられたものと考えられます。

現在、この調査地の南側に発見した溝と平行に設けられた排水溝が存在していることから、発見した溝については近世後半頃の宅地に伴う排水溝と考えられます。



加治・神前・畠中遺跡（調査地2）



新井ノ池遺跡



貝塚寺内町遺跡

遺 跡 名	調査 件数	調査面積 (㎡)	遺 跡 名	調査 件数	調査面積 (㎡)
脇 浜 遺 跡	2	22.00	加治・神前・畠中遺跡	11	143.15
貝塚寺内町遺跡	6	40.20	新井ノ池遺跡	2	18.00
明 楽 寺 跡	1	13.50	麻 生 中 遺 跡	1	69.00
沢 海 岸 遺 跡	1	19.25	堤 三 宅 遺 跡	1	11.50
沢 新 開 遺 跡	1	8.00	窪田遺跡・窪田廃寺	2	10.75
沢 遺 跡	1	22.50	地 蔵 堂 遺 跡	1	3.75
小瀬五所山遺跡	1	6.00	王 子 西 遺 跡	1	3.75
小瀬大道端遺跡	1	4.25	清 児 遺 跡	1	6.50
福 田 遺 跡	1	3.00	木 積 観 音 寺 跡	1	3.00
海 塚 遺 跡	1	3.45	遺 跡 範 囲 外	12	274.75
			合 計	49	686.30

平成19（2007）年度発掘調査一覧表（12月末日現在）

願泉寺本堂蟻股の「二十四孝」彫刻

蟻股は、桁（けた）から上の荷重を支えるために、梁（はり）などにおかれる構造材で、蛙が股を広げたような形をしています。願泉寺では、本堂内の矢来（やらい）とよばれる部分（内陣と外陣の境界部分）を取りかこむように「二十四孝」（中国で古くから有名な孝子24人の総称で、それぞれの孝行話を集めた教訓書が元の時代に著されています）の彫刻が施された20組の蟻股が取り付けられています。

今回紹介するのは、1組の蟻股に「二十四孝」のうち2人の物語の1場面が彫刻されたもので、楊香（ようこう）と山谷（さんこく）の彫刻です。楊香の物語は、山中で楊香父子が虎に襲われたとき、楊香が自ら犠牲となり父を助けようとしたところ、結果2人とも助かったというお話です。また、山谷の物語は、宋代の詩人である山谷の家には多くの使用人や妻がいたが、彼は自ら母親の排泄物の世話をするほど母親によく仕えたというお話です。

なお、下部には「さんこく」、「やうきょう」という画題や「南ノ間ノ中」という設置場所を示す墨書（ぼくしょ）のほか、「文化七庚午年三月日 御開山聖人五百五十回御遠忌ニ付再彩色 寄附主金屋新兵衛」という墨書があり、彩色は浄土真宗開祖親鸞の550回忌にあたり文化7（1810）年に修復されたことがわかります。



楊香

山谷

※この蟻股は現在取り外されており、下記見学会の際に間近で見ていただくことができます。

貝塚御坊願泉寺 平成大修復 定期見学会のお知らせ

願泉寺では、重要文化財本堂の半解体修理のようすを見学いただく機会として、毎月第3日曜日に定期見学会を開催しています。2月～4月の予定は以下の通りです。

開催日 平成20年2月17日(日)、3月16日(日)、4月20日(日)

時間 午前10時～午後4時（時間内の見学は自由）

※見学会当日は午前10時30分と午後1時30分からの1日2回、担当者による説明がおこなわれます。

表紙の写真

表紙の写真は貝塚市で保存していた旧貝塚町役場の看板と町役場の古写真・設計図及び幹工務店より借用した昔の大工道具です。（いずれも下記特別展の展示資料です）

今回は近代建築調査の成果を中心に取り上げました。特別展では調査の成果や大工道具を展示したり、歴史文化セミナーで様々なイベントを行いますのでご来館とご参加をお待ちしております。

かいつか文化財だよりテンプス32号



平成20年1月31日発行

貝塚市教育委員会

〒597-8585 貝塚市島中1丁目17-1

Tel (072) 433-7126 Fax (072) 433-7107

Email : shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印刷 (株)和歌山印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年4回発行：各1,000部

印刷単価：67.20円